

「医のプロフェッショナリズム」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科 循環器内科学

白 山 武 司

本誌の特集号では最新の医学的進歩を題材とすることが多かった。しかし、特定の分野にかたより専門外の人間には詳しい内容までは理解しがたい、という懸念がぬぐいきれない。そこで今回は、すべての府立医大関係者が関わり、かつ本学ではあまり議論されることがなかったものとして、「医療におけるプロフェッショナリズムとは何か」をテーマとした。

「プロとは何か」と問う時、野球などのスポーツ選手がアマチュアにみられない高度な技と観客にアピールするプレーを心掛けて切磋琢磨している姿が思い浮かぶ。一方医師および医療関係者は、患者に対して同じような意識をもっているであろうか。大学人ならば、高度な技をみがき最新の知識を開発する心意気を持ち合わせる人が多いと思うが、ともすれば自分たちだけの世界から恩恵をたれるがごとき対応に陥らないとも限らない。産官学が結託し、はたまた自己の欲求を「患者のため」と言い換えて八百長試合を演じているようでは、本当のプロとはいえない。さらに怖いのは、閉じた世界の中では、プロにあるまじき行為に陥ってもなかなか気づかない。医療者がプロとして活動するには、どのような落とし穴があり、どのような対策ができるのか、筆者自身の反省もこめて、今回の記事から考えてみたいと思う。

今回執筆いただいたのは主として学外の諸先生である。筆者の関わる American College of Physicians 日本支部において Health and Public

Policy Committee でプロフェッショナリズムについて検討、啓発活動を活発に行っておられる大生先生、郷間先生、尾藤先生を核にプロとしての医療者における中核的問題群をご執筆いただいた。また、プロ集団として医師の立場・あり方をどのように自律管理できるのかを考察するために、日本循環器学会における専門医制度委員会でお世話になっている寺崎先生、京都府医師会から依田先生に専門家集団としての「会」の現状をご報告いただいた。また滝下先生には、立場を変えて看護職では「専門家像」をどのように構築してきたのかについて書いていただき、医師の意識と対比させたいと考えた。

全体の構成では、自分が医師であるために専門家としてのさまざまなパラメディカルからの記事が不十分に終わったとのそしりは免れないが、おそらくどの職種にも共通した問題群が今回の記事に含まれていると考えている。これを機会に本学関係者にもプロとは何か、との議論がわきおこることを期待したい。

最後に、執筆いただいた諸先生には、立派な原稿をお寄せくださり、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ほとんど面識もなく大変お忙しい中、こころよく記事を寄せていただき、ありがとうございます。とくに今回は東日本大震災への救助活動の合間をぬってのご執筆もあり、申し訳なかったと思います。紙面を借りて心よりお礼申し上げます。